

# 山と博物館

第23巻 第1号

1978年1月25日

大町山岳博物館



湯峠にて(小谷温泉) 撮影 山田 寛

## 昔の大町スキー場

昭和の始め、私達大町の小学生にとって中山は唯一の楽しいスキー場であった。現在の大町スキー場である。当時スキーをする人は大人にも少なく小学生も一部の者だけだったように思う。私達は寒休みや日曜祭日には友達と誘いあって滑りに行った。二月六日皇后誕生日の地久節と十一日紀元節の頃は特に雪がよかったことを覚えている。往きは今のバス道路を歩いて行った。道中半ばに清水が流れる目標の休憩場があり重いスキーをかついで歩いた後こゝで飲んだ冷たい水のおいしかった味は忘れられない。スキー板は九日町の栗田や北原町の粕谷のイタヤの自作品が使われ長野市西沢書店(現在のニシザワスキー)や飯山の伊村のものを使う者もいた。靴はゴム長で上等のものは皮の編上靴を利用しフイットフェルト縮具にくりつけた。滑る場所は裏山が多く長さ百米程の当時としては急斜面を無転倒で降ることが目標であった。成功すれば得意満面でありその度にかん声(かんとこゝろ)がスキー場一ぱいに拡がる子供の楽園であった。誰にも教わずどうにか転ばないように滑る方法を考え、障害物があれば避けて回る技術も自然に覚えていった。スキー場からは居谷里の奥にある近道を滑って帰った。落葉松林をぬつての長い林間滑降はたいへん楽しいものだった。表山に九日町の山案内人北沢さんが建てた萱ぶきの小屋があり吹雪の時などはよく休ませてもらった。スキー場への交通に六九町の町田さんの経営する馬そりがある。たまにこれに乗ったが暖房に火鉢が用意されていた。伝わる雪のきしみ、その後に残る美しく金属的に光る二本のすじ、燃える炭火の紅はきびしいあたりの寒さと共に今も鮮かに思い出される。

その後、大糸沿線には多くのスキー場が開発されその発展ぶりには目を見はるものがある。五十年の昔を想うと感慨は非常に深い。とまれ、白銀の世界を滑ることは今も昔も変らぬ無上の喜びである。

(丸山 彰 元大町北高等学校 教諭・日本山岳会員)

# 礼文島の植物とその地史的分布 (3)

横内 悦 郎 齊

マメ科 ナンテンハギ(日)、タカネオウギ(北マ)、チシマゲンゲ(大)、センダイハギ(大)、ヒロハクサフジ(北)、レブソウ(固)、シロバナレブソウ(無)、リシリオウギ(北)、エゾヤマハギ(日)、フウロソウ科 チシマフウロ(大)、イチゲフウロ(北)、エゾフウロ(北マ)、ハマフウロ(北マ)。

ミカン科 ヒロハノキハダ(北マ)、ツルシ

キミ(北マ)。  
トウダイグサ科 エゾズリハ(裏)。  
ガンコウラン科 ガンコウラン(北マ)。  
ウルシ科 リシリツタウルシ(北マ)。  
カエデ科 エゾイタヤ(無)。  
モチノキ科 ハイイヌツゲ(裏)、ツルツゲ(固)。  
ニシキギ科 オニツルツゲ(無)、ヒロハノツリバナ(北)、オオツリバナ(北)、ムラサキツリバナ(北マ)。  
マタタビ科 ミヤママタタビ(北)。  
オトギリソウ科 エゾオトギリ(北マ)、イワオトギリ(北)、ミズオトギリ(日)、リシリオトギリ(無)。  
スミレ科 キバナノコマノツメ(大)、オオタチツボスミレ(固)、アイスチツボスミレ(大)、ミヤマスミレ(大)。  
ジンチョウゲ科 レブソウ(大)。(無)、カラフトナニワズ(無)。



レブソウ 桃岩

アカナナ科 ヤナギラン(大)、ミヤマアカバナ(北マ)、エゾアカバナ(大)。  
セリ科 ホタルサイコ(北マ)、エゾボウフウ(大)、エゾヨロイグサ(無)、シラネニンジン(北)、ハマボウフウ(大)、エゾニユウ(北)、レブソウ(北)、エゾノシウド(北)、ミヤマセンキ



レブソウ 高山

ユウ(北マ)、マルバトウキ(大)、ミヤマブニンジン(北)。  
**合弁花類**  
イチヤクソウ科 エゾイチヤクソウ(北マ)、オオウメガサソウ(大)、コバノイチヤクソウ(北マ)、ジンヨウイチヤクソウ(北)、コイチヤクソウ(大)。  
ツツジ科 コメバツガザクラ(北)、イワヒゲ(北)、イソツツジ(北)、ツルコケモ

モ(大)、エゾノツガザクラ(北マ)、キバナシヤクナゲ(北)、エゾクロウスゴ(北マ)、イワツツジ(北)、ウラシマツツジ(北マ)、コケモモ(大)。  
イワウメ科 イワウメ(大)。  
サクラソウ科 クサレダマ(大)、トチナイソウ(大)、サクラソウモドキ(固)、エゾコザクラ(大)、レブソウコザクラ(固)、シオマツバ(大)、ヤナギトラノオ(大)。  
リンドウ科 チシマリンドウ(大)、リシリリンドウ(北)、チシマセンブリ(北)、フデリンドウ(南)。  
ハナシノブ科 カラフトハナシノブ(北マ)。  
ムラサキ科 ミヤマムラサキ(固)、シロバナミヤマムラサキ(無)、ハマベンケイソウ(北)。  
シソ科 シラネイソゴマ(無)、チシマオドリコソウ(大)、エゾミンガワソウ(北マ)、シロバナエゾミンガワソウ(無)、エゾタツナミソウ(北)、イブキジャコウソウ(大)、ナミキソウ(大)。  
ゴマノハグサ科 エソコゴメグサ(北マ)、ウルップソウ(大)、ヨツバシオガマ(北マ)、シオガマギク(日)、ネムロシオガマ(北マ)、エゾノヒナウスツボ(北マ)、キクバクワガタ(北マ)、シラゲキクバクワガタ(無)、エゾヒメクワガタ(北)。  
オオバコ科 エゾオオバコ(北)。  
アカネ科 アカネムグラ(北)。  
スイカズラ科 ミヤマガマズミ(南)、チシマヒヨウタンボク(北)、クロミノウグイスカグラ(北マ)、エゾヒヨウタンボク(北マ)、ウコンウツギ(北)。  
レンブクソウ科 レンブクソウ(大)、オミナエシ科 チシマキンレイカ(北)、ハ



ネムロシオガマ 桃岩

オオバコ科 エゾオオバコ(北)。  
アカネ科 アカネムグラ(北)。  
スイカズラ科 ミヤマガマズミ(南)、チシマヒヨウタンボク(北)、クロミノウグイスカグラ(北マ)、エゾヒヨウタンボク(北マ)、ウコンウツギ(北)。  
レンブクソウ科 レンブクソウ(大)、オミナエシ科 チシマキンレイカ(北)、ハ



タカネシヨウジョウスゲ 桃岩

クサンシヤジン(北マ)、チシマギキョウ(大)、イワギキョウ(大)。  
 キク科 レブンユキソウ(北マ)、アキタブキ(北マ)、カンチコウゾリナ(北)、フオーリーアザミ(北マ)、ナガバキタアザミ(北マ)、アキノキリンソウ(南)、チシマアザミ(北)、ホンバオトコヨモギ(無)、ヤマハハコ(北)、コウリンタンポポ(無)、レプントウヒレン(固)、ミヤマオグルマ(北マ)、エゾオグルマ(大)、フタナミノウ(固)、ヤナギタンポポ(北)、アサギリソウ(北マ)、サマニヨモギ(北マ)、エゾノコギリソウ(北)、シロサマニヨモギ(無)、イワヨモギ(北)、シロヨモギ(北)、チシマヨモギ(北)、シコタンヨモギ(大)、ミヤマアズマギク(大)、エゾゴマナ(北マ)、ベニバナノコギリソウ(無)、ミヤマコウゾリナ(蝦)、オクコガネギク(蝦)、エゾサワ

アザミ(北)、ヨツバヒヨドリ(北マ)、ミミコウモリ(北)、エゾヨモギギク(無)、フタマタタンポポ(北マ)、エゾムカシヨモギ(大)、シカギク(大)、コシカギク(大)。  
 単子葉植物  
 アマモ科 スガモ(北)。  
 イネ科 ミヤマノガリヤス(大)、カラフトイチゴツナギ(北)、ハマニンニク(無)、チシマドジョウツナギ(大)、エゾヌカボ(大)、チシマカニツリ(大)、リシリカニツリ(北マ)、ネマガリダケ(北マ)。  
 カヤツリグサ科 タカネシヨウジョウスゲ(無)、ミヤマクロスゲ(北マ)、ネムロスゲ(大)、ヤマメラスゲ(大)、オクノカンスゲ(北マ)、ホロムイスゲ(北マ)、イツボンスゲ(大)、カミカワスゲ(北)、ヒロハオゼスマスゲ(北マ)、シコタンズゲ(北)、オノエスゲ(北)、ワタスゲ(大)、エゾノコウボウムギ(大)。  
 イグサ科 ヒメコウガイゼキシヨウ(大)、エゾホソイ(大)、ヌカボシソウ(日)、タカネスズメノヒエ(大)、クモマズメノヒエ(大)。  
 ユリ科 ミヤマラッキョウ(北)、ギョウジャニンニク(北)、オオバユリ(北マ)、ツバメオモト(北)、スズラン(北)、クロユリ(大)、ヒメカンソウ(北)、エゾ

### 統 計 と 分 布 論

分 類	分布型と分布系	科 数	計														
			(1) 飛び越し型	(2) 南まわり型	(3) 北まわり型	(4) 日本海めぐり型	(5) 大陸共通型	(6) 固 有 型	(7) 北マキネシア系	(8) 蝦夷陸奥地域系	(9) 関東地域系	(10) 襲連紀地域系	(11) 裏日本地域系	(12) フォッサ・ファンナ地域系	(13) 無 系 統	(14) 史前帰化植物	(15) 帰化植物
シダ植物		8		1	2	1	10										15
裸子植物		3			2		1			4							7
離弁花植物		34		1	40	5	39	7	40	1			3		13	2	151
合弁花植物		15		3	26	1	24	5	25	2					8	1	95
単子葉植物		8		3	27	2	18		11						4		65
総 計		68	—	8	97	9	92	12	80	3	—	—	3	—	26	2	333
自然フロラとの割合		—	—	2.4	29.5	2.7	27.9	3.6	24.2	0.9	—	—	0.9	—	7.9	—	100.0
全フロラとの割合		—	—	2.4	29.2	2.7	27.6	3.6	24.0	0.9	—	—	0.9	—	7.8	0.6	0.3

ヒメアマナ(北マ)、エツゼンテイカ(北)、タチギボウシ(北)、エゾスカシユリ(北)、クルマユリ(北)、シヨウジョウバカマ(南)、ヒメタケシマラン(大)、

チシマゼキシヨウ(大)、オオバナエンレインソウ(北)、リシリソウ(北)。  
 サトイモ科 コウライテンナンショウ(南)、ヒロハテンナンショウ(北)、ミズバシヨウ(北)、ザゼンソウ(北)。  
 アヤメ科 ヒオウギアヤメ(北)、ノハナシヨウ(日)。  
 ラン科 ホテイアツモリ(無)、コアナチドリ(北マ)、レプンアツモリ(無)、ノビネチドリ(北)、キンチドリ(北マ)、コイチヨウラン(北マ)、オニノヤガラ(南)、コフタバラン(大)、ミヤマフタバラン(北)、ヒメムヨウラン(北)、サカネラン(北)、ハクサンチドリ(大)、タカネトンボ(北)、ミヤケラン(北)。

#### むすび

礼文島の植物は、シダ類八科十五品種、裸子類三科七品種、離弁花類三十四科百五十一品種、合弁花類十五科九十五品種、単子葉類八科六十五品種で、その総計は六十八科三百三十三品種である。

これを地史的分布の上から見ると、北まわり型の九十七品で二九・五%と殆んど全植物のき達している。これは礼文・利尻両島が大陸方面からと千島列島方面から、北海道本島への植物供給の中継地になっている為である。

次は大陸共通型の九十二品二七・九%で、これも前と同じく東部シベリア方面から北海道本島への植物供給の中継地となっている為である。

第三位は北マキネシア系の八十品二四・二%で、これの多いのは礼文・利尻両島が、この地域に含まれるから当然の結果である。礼文島のフロラは、主として北まわり型、大陸共通型、北マキネシア系の三者によって構成されている。その合計は二七一品八一・六%で、全フロラのき以上を占めている。次は分布上無系統としたもので二六品七・





ハマボウフウ スコトン

(東筑摩郡四賀村)

九%である。これは色変りとか形変りとかという変種、変形の類で、分布上は余り重きをなさない。母種がある所、その出現の可能性があるからである。

次は固有種の一二品三・六%で、この小島にこれだけの固有種が蔵されている事は注目しに値いするもので、島の歴史を物語るものである。

次は日本海めぐり型の九品二・七%で、これも相当注目すべき数字で、日本海の最北端に位置する島としてはなかなか多い。

次は南まわり型の八品二・四%で、遙か南方地域をまわって、はるばるとこの北辺まで分布しているという事は、植物の生命力、就中適応性の大きなのに驚かされる。

次は蝦夷陸奥地域系の三品〇・九%と、裏日本地域系のやはり三品〇・九%である。両地域共比較的近距离にあるから、この数は少ない感じであるが、これは北海道本島と隔絶している為である。

史前帰化植物と思われるもの僅かに二品、帰化植物も僅かに一品というものは、本島が今から二八五年前に初めて内地人が漁業開拓に志し、それに海中の孤島の為、外来植物に汚染されていない為である。

古いカビの生えたような話で恐縮ですが、信州山岳界の一種話としてお読み頂ければ幸いです。それは昭和二十一年の春浅き頃で、二月か三月の頃でした。場所は対山館の三階の表に面した部屋でした。

当時泣く子もだまると言われたGHQからの命令で、兎の捕獲について対山館に泊ったわけです。

GHQ(日本占領連合軍)の言うのには日本人は動物性蛋白質が極度に不足して、この分では栄養失調者が多分にでる恐れがある。それを救う為に、米国から新鋭の缶詰製造機をとりよせて野兎の缶詰を作り配給する。

この機械は入り口から野兎を入れると、その操作によって、皮、血、骨、内臓、肉と選別し、出てくる時は、肉の缶詰として直ぐ使えるという便利なものである。野兎が一日幾頭とれるか調べて報告しろというのであった。

そこで日本では、そのような機械を入れて頂いても、野兎はとてども多くはとれないと具申ししたが、聞き入れてくれた。米国ではこれを野山に持って行って使うが、

一日に少くとも数百個の缶詰が出来る。現地に行つて現状を調べ報告するようにと、大体こんな話だった。その調べる遣に当たったのが斯くいう私で、止むを得ないので家に配給された乏しい米と甘藷をリユックに詰め、下高井は志賀高原、佐久は川上、下伊那は大鹿、北安は大同ときめて、対山館に泊めて貰い、

狩人を二、三人招いて実状を聞いて歩いた。電灯を思うままに使えない頃だったので、補助のロソクをたよりに話して貰った。結局どこでも勢子を使って山の上に追いあげて綱を張って、そこへ飛び込むのを鉄砲で打つても、せいぜい七、八頭が一杯だろうという話だった。

対山館でこの話を聞き終り、さあ寝ようとする頃、十時頃か館主の百瀬慎太郎氏が、酒と少しばかりの肴をたずさえて、私の部屋にいられた。

話は当然のことながら山の開拓のことになった。それも主として白馬や針ノ木の話で、そしてその話は、次で日本山岳会の年報「山岳」に及んだ、しかも残念そうに握り拳で、コタツ板を叩きながらグリグリと呑んで繰り返す話すのだった。

それによると昨春秋、東京から友人がきて、「山岳」をぜひ貸してくれ日本史を書く資料に使うという事であった。この友人(名は言われなかった)は、こともあるうに、百瀬さんはとては、命から二番目の山岳を売って、生活費に当て

# 百瀬慎太郎山を失う

## 横内 斉

てしまったというのであった。私は慰める言葉も知らない、「ただ百瀬慎太郎山を失うという事ですね」と繰り返してあげた。日頃気にかかれた事を心置きなく語られ、あきらめにも似た心持で階段を下つて行かれた。時計は十二時を指していた。

第22巻12号の青木治氏執筆の「小谷地方の塩の道」に多くの誤りがありました。深くお詫びし訂正いたします。

2Pサブタイトル糸魚川街道：糸魚川街道に同上段選完：選定に、同上段穂高神社大名神：穂高神社名神に、同2段石墳：古墳に、同下段後見：後略に、3P上段満寺文書：満寺文書に、同2段塩之八覚帳：塩之出入覚帳に、3P写真説明上段今は屋は：今は屋根は、同下段背負子：背負子に訂正

訂正

第22巻12号の青木治氏執筆の「小谷地方の塩の道」に多くの誤りがありました。深くお詫びし訂正いたします。

2Pサブタイトル糸魚川街道：糸魚川街道に同上段選完：選定に、同上段穂高神社大名神：穂高神社名神に、同2段石墳：古墳に、同下段後見：後略に、3P上段満寺文書：満寺文書に、同2段塩之八覚帳：塩之出入覚帳に、3P写真説明上段今は屋は：今は屋根は、同下段背負子：背負子に訂正

ライチヨウ寄付金  
一〇五〇〇円 茨城県水戸市  
三の丸小学校4年4組一同

52年度山岳博物館協議会委員  
山岸陽男(杜小学校)、住田正(仁科台中学校)、横川豊(大町山岳会)、宮下潔(大町商工会議所)、須沢守信(青年商工研究会)長沢修介(大町山の会)、小林きく代(連合婦人会)、桃井松太郎(市議会)、北沢善一(ク)、武居俊文(ク)、中牧豊光(ク)、伊東主恵(ク)、傘木繁博(ク)、山本携拳福島融、原田貳、松本明、西山千明、西沢聖賢、成沢祥人(順不同、敬称略)

資料寄贈ありがとうございました  
キジ 1番 大町市社松崎  
飯島 橋 雄 殿

山と博物館 第23巻 第1号  
発行所 長野県大町市TEL②〇二一  
一九七八年一月二十五日発行  
印刷所 大町市 儀町 大町山岳博物館  
大糸タイムス印刷部  
定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野二二)九九三

山と博物館 第23巻 第1号  
発行所 長野県大町市TEL②〇二一  
一九七八年一月二十五日発行  
印刷所 大町市 儀町 大町山岳博物館  
大糸タイムス印刷部  
定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野二二)九九三

山と博物館 第23巻 第1号  
発行所 長野県大町市TEL②〇二一  
一九七八年一月二十五日発行  
印刷所 大町市 儀町 大町山岳博物館  
大糸タイムス印刷部  
定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野二二)九九三

山と博物館 第23巻 第1号  
発行所 長野県大町市TEL②〇二一  
一九七八年一月二十五日発行  
印刷所 大町市 儀町 大町山岳博物館  
大糸タイムス印刷部  
定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野二二)九九三

山と博物館 第23巻 第1号  
発行所 長野県大町市TEL②〇二一  
一九七八年一月二十五日発行  
印刷所 大町市 儀町 大町山岳博物館  
大糸タイムス印刷部  
定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号(長野二二)九九三